

初年次教育はどこへ行くのか

松本美奈
読売新聞社

1. はじめに

最初に、自己紹介から始めます。私は、読売新聞社で「大学の實力」という調査とそれに基づく連載を担当しています。毎週木曜日の朝刊で書いています。大学の教育力を示し、受験生に提供することを目的にしたもので、今年で3年目になります。この調査を始めたとき、私の教育記者としてのスタートです。

本日の3人の先生のお話には、共感するところが多くありました。宮崎学園短期大学の宗和先生のお話の中にあつた、「やらされる」では教育はうまくいかないということ、当たり前のことを地道に実践されていることに感動しました。

また、成田先生にお話しいただいた高千穂大学の取り組み。私は以前、現場を見せていただいたことがあります。一人ひとりの学生のニーズをきちんとつかんで、すぐに組織に返し、組織から全体を改めていく。その俊敏な動き、そして適切さ、柔軟性に舌を巻きました。ユニバーサル時代の教育というものをよく理解されていると感じます。

千葉大学の前田先生のお言葉の中で非常に印象に残ったのは、結果の可視化を重視しすぎではないかということです。目標に向けてのプロセスを大切にしたいというのは、教育では当たり前のことです。しかし、残念ながら今の時代、なかなかプロセスをじっくり見ていられないという課題があります。

今、「大学の實力」のご紹介をしましたが、では「實力のある大学」とはどういう大学なのでしょう。私は、学生の可能性を引き出せる大学、これが實力ある大学だと思います。成田先生がお話しされたように、「この大学に入ってよかった」という実感は、卒業後、かなり後になってからではないと出てこないこともあります。すぐにアウトカムを求められるご時世、なかなか實力が見つらく、また、発揮もしづらい。教育機関としてはきつところだなと思います。

2. 「大学の實力」調査でもっとも重要視しているのは「教育力」

「大学の實力」調査は、偏差値やブランドによらない大学選びのための情報提供を狙いとしています。偏差値やブランドだけで選んでしまったがために、挫折してしまう、人生を一回降りなければならなくなった学生たちを、私は今まで目の当たりにしてきました。その弊害が小中高校にも出てきています。果たしてそれでいいのかということを考えてもらうのも、この調査の狙いです。

「大学の實力」調査は、今年で3回目です。大学からの回答は8割を超えました。調査項目で、一番重要視しているのは「教育力」です。その教育力をどう測るか。例えば、PBLをやっているかどうか、グループ学習を設けているか、その場所を提供しているかということのほかに、退学率、卒業率、キャンパスライフを予想できる数値はどうなっているか

などから分かると思います。それらを一覧表にして、毎年7月、高校で三者面談が開かれる直前に出しています。「大学の實力」を見てわからないことがあったら、オープンキャンパスで大学の人に聞いてくださいと、勧めています。

「大学の實力」では、教育力を測るために、外部検討委員の方に協力してもらっています。法政大学の元総長である清成忠男先生を座長に、天野郁夫先生、絹川正吉先生らにご参加いただき、設問設計から回答の分析まで幅広くご助言をいただいています。今年は、現役の学生にも公募で参加してもらいました。

「大学の實力」では、毎年テーマを設定しています。1年目は「FD」、2年目は「学生支援」、3年目は「就職に強い大学とは」がテーマでした。就職に強いと言っても私たちは就職ランキングをつくることを目的にはしていません。社会で自立できる力を学生にどのように身に付けさせているかを調査しています。

大学への質問の中で、1年目から一貫して聞いているのは、初年次教育についてです。初年次教育とは、「移行」と「適応」を助ける教育プログラムという漠とした言い方で捉えています。学びの転換、意欲喚起、コミュニケーション力、こうしたものを目指している大学が多いということ現場を周りながら感じました。

3. 私立大学の取り組みで目立つ入学前教育

初年次教育に関する今年度の調査結果を見てみると、全学で実施している大学は、年々増えています。特に目立つのは、学習スキルの教育、つまりアカデミックスキルです。レポートの書き方、議論の仕方などを教えている大学が多くありました。

また、入学前教育を導入している大学は、去年から8%も増え、ほぼ半数でした。入学前の取り組みで目立つのは、私立大学の取り組みです。補習教育や学習スキルの教育、学習支援センターなどによる学習相談を行っています。実際に取材記者として多くの大学現場を訪れて感じたことは、初年次教育は、1年生になってからでは遅いと考える大学が増えているということです。合格が決まって年明けからオリエンテーションを行う大学が目につくようになりました。2番目の特徴としては、基礎力を重視していることです。大学の学びに移行するためには、まず、基礎力を付けなければいけません。高校までの学習の振り返りを初年次教育に入れてよいのかについては議論がありますが、現実として必要だということで取り入れているようです。また、「居場所」をつくることにも力を入れています。今の学生は繊細で、例えばお昼を一人で食べるなど、一人で行動するのが困難という人も少なくありません。そこで「君は一人じゃないだよ」「みんながいるよ」「居場所があるんだよ」ということを示してあげるのも大学の大切な役割となっています。教職員と一緒に昼を食べる「お弁当クラブ」などをつくらせている大学もありました。

さらに、一人ひとりへの対応を重視する取り組みも広がっています。その一つが担任アドバイザー制の導入です。一人の教員がどれくらいの学生を担当しているかを去年聞いたところ、3割の大学が10人～20人と回答しました。できるだけ、個々に対応できるよう工夫している現状が見られます。

4. 工夫を凝らした学習支援センターを設置する大学

次に、具体的な取り組みですが、例えば、基礎力重視という点では、小学校からの積み

直しを行っている大学があります。ある大学では、算数、国語をやり直すことで意欲を引き出しています。

工夫を凝らした学習支援センターを設置する大学もありました。ある大学では、正門の真ん前に学習支援センターを設置し、1階はファストフードが入っています。しかし、席はありません。座るところがなく2階に行くと、そこが学習支援センターになっているのです。すると、「待ってました」とばかりに先輩たちがやってきて、「なんの科目にしますか?」と聞かれる。思わず、「数学」と答えると、「数学ですね。3番テーブル、山田先生お願いします!」とあって、いつのまにか、先生と向かい合わなければいけないことになっています。教えるのが上手な選りすぐりの元高校の先生たちが常駐しているため、学生に自信を付けさせるのも上手です。「わかっているじゃないか」と言われると、「自分はできる」と学生は思います。そして、もう一回来る。学生に聞いてみると、「ちょっとはまったんで」という言葉が返ってきました。「来ると勉強するし、勉強すると成績上がるんですよ」と言うのです。

学習支援センターにもいろいろあり、うっそうとした林の中に設置されている大学もあります。「学生が来やすい」という立地も大事だと、この学習支援センターに教えてもらいました。

5. 初年次教育は学生の「移行」と「適応」を支援する仕組み

川島先生が最初に、「初年次教育は、カリキュラム体系の中でおさまりきれなかったものを大切にしてきた」とおっしゃっていましたが、具体的な取り組みを見てきた中で実感するのは、これがまさに初年次教育の真骨頂だということです。初年次教育はカリキュラムの中におさまらないけれど、間違いなく、「移行」と「適応」を支援する仕組みだと思いません。このような初年次教育を支えるためには、組織性、学生に寄り添う姿勢、共通認識と使命感が大事だと思います。うちの大学はどうあるべきか、うちの学生をどう育てたいかということを中心に考えた時、その大学の初年次教育は間違いなく、「あの大学を卒業してよかった」という取り組みになるのではないかと思います。

逆に、不安もあります。大学の先生、職員の皆さんは、こうした初年次教育の専門的な研修を受けずに、現場に出されていることが多いようですが、予算、人などの手当がなければ継続的に実施できません。つまり組織です。組織の後ろ盾がなく、「きみたちのやる気にまかせるよ」といって学生さんをまかされても、先生や職員たちは、大変だろうと思います。実際、課題を多く抱える大学も見てきました。

また、可視化できる結果を重視するあまり、パターン化してしまうのではないかとということも懸念しています。よく聞くのは、「隣の大学が始めたからうちの大学も始めた」という言葉です。隣の大学に必要な教育が、果たして自分の大学にも必要でしょうか。自分の大学や目の前の学生たちに必要かどうかを見極めなければ、パターン化してしまい、「みんながやるから」「やらされているから」「評価されるから」というものさしの一つに終わってしまわないだろうか心配しています。初年次教育が最も大切にしている、ダイナミックに学生と向き合うという姿勢が、どこかで消えてしまわないだろうか危惧しています。

さらに、頑張る人とそうでない人が二分化している大学も散見されます。燃え尽きる寸前まで一生懸命がんばっている教職員のみなさんと、その反対に「もうたくさん」と、深

い海にもぐってしまう深海魚のような群れも目にします。

加えて、学生がすごい勢いで変化しているのも不安の一つです。私は小学生や中学生の教育の取材にも関わっていますが、インターネットのネイティブユーザーとでもいうような、ネット世代が大学に入ってきたとき、大学はどうなっていくのでしょうか。今ですら「言葉が通じない」「単語でしか発することができない」「文章にできない」といった学生でお困りの先生も多いと聞くのに、それよりももっと進んだ世代が控えているのです。この世代が大学に入ってきたとき、そしてその世代の先輩である学生と混在したとき、はたして大丈夫だろうか…と心配に思っています。私にも娘がいますが、娘や娘の友達と会話することに困難を感じることも、実はあります。

6. もっとダイナミックに展開してほしい

このような不安はありますが、私は初年次教育にとっても期待しています。全入時代という時代を歓迎しています。多くの人が大学教育という恩恵を受けられるのは、私はうれしいと感じています。偏差値教育や学習指導要領で固まった学びから解放され、やっと大学という自由な学びに触れることができる。この機会をたくさんの子どもたちにあげたい。そのために、初年次教育にもっとダイナミックに展開してほしいと期待しています。

「大学の實力」では、学長に今の学生像を聞きました。「自信がない」「早々と自分をあきらめてしまう」「頭はよいが、こぢんまりしている」「基礎力が弱い」「目的意識が希薄」「精神的に弱い」という言葉が返ってきました。しかし、このような学生さんたちは、突然出てきたわけではありません。小学校、中学校、高校を経て、そういう風に育ってきた人たちなのです。それを転換し、新しい学びの場に迎え入れるためには、やはり初年次教育が必要だと思います。

大学はそもそも自由の府だと繰り返し私に教えてくれたのは、天野郁夫先生です。だからこそ、自立した学習者であることが必要で、これがなければ社会人として生きていくことは難しいと先生はおっしゃっていました。

初年次教育を通してしっかりと自分を見つめ、「自分は生きていてよかった」「自分は今ここにいる意味があるんだ」と学ぶ機会があるのが大学です。そのことを、最初に実感できるのが初年次教育だと信じています。